

〈原著論文〉

福祉形成における両極性と相互包摂性 ——相対主義と絶対主義の対立構造を越えて全体性の作用的統合化に 向かう方途としての福祉性——

牛 津 信 忠

抄 録

相対性と絶対性が作用において統合化される「現実的実在 (actual entity)」（ホワイトヘッド）の領域に視点を置いて人間存在について考察していく。現実の実体領域においては、流動的な機械論的プロセスが存在するのみである。われわれはそこにある在り方を唯物論的科学主義とする。

これに対して、現在においては把握しきれない動的な存在がある。それは、目に捉え難い存立態である。それをわれわれは、プロセスにある作用という態様においてのみ認知することができる。例えば、水の流れに見ることができるように。それはパースペクティブを有するという在り方で、前方に想念できるという態様でしか捉えられない。

存在の現実性を保持する為の「人間の生の流れ」として本文に述べている福祉性の価値方向がその理論的パースペクティブの核に位置づけられる。その福祉性こそ「現実的実在」を解きほぐす鍵となる。

キーワード：両極性, 相対主義, 抱握主体, 全体性, 人間福祉

- 1 人間世界における両極性の内在：量子論的考察を軸にした存在解明
- 2 両極性と二元論の類似性と相違性：二元論から離脱し両極論と両立論へ
- 3 相対主義と絶対主義の対立構造を越えて：両者の全体的存立の可能性解明
- 4 両極における相互包摂への指向動向
- 5 相互包摂動向による全体と部分の存立：D. ボームの論拠の検討
- 6 全体性の作用統合化に向かう流動的存立基盤
- 7 一たる個の存立条件を連続的に定立する
- 8 相互包摂状況の連続が築く福祉的生の基盤
- 9 福祉形成における両極性と相互包摂性

1 人間世界における両極性の内在：量子論的考察を軸にした存在解明

われわれはこの稿において存在（主として人間）の「両極的」存立のなかにおいて、一たる個の確立、一たる存立体の客観化、「永遠的客体」への道、客体化の「選別」の議論、さらに存在の「抱握」、等々と表現されているホワイトヘッドによる議論⁽¹⁾を吟味検討して、全ての存在の一たる存立可能性の条件成立への道を探っていこうとする。議論を客観性にに基づき進めるときの客観化できるかできないかは、存在の内的外的要因をいかにしたら客観化要因へと近接させていけるかに関わっている。それはどのようにしたら一たる存立への志向動向を環境因子及び内的因子、さらにその相互的因子のなかに形成し、それに即した対応の為の状況設定をなするかということに依拠する。

この状況設定ないし条件の開発に言及し、一たる存立を可とする要件を存在の内と外にいかにかに形成するかということに視点を注ぐときに、存在の内に個における指向性の各様なる発揚を、それとともに存在の外に、その個的存立を包摂する統合性の働きを必須を見出すことができる。外からの働きは、個的存立体には把握することが困難である、それは経験によって内的把握力として対応力の連鎖が用意されるまでは、個にとって未知の世界である。しかしこの外的包摂の働きかけは絶えず統合力に集約されるかぎりにおいて個に対して主体的に働き、その個的存在の有り様を「抱握」しつつ、さらなる一たる存立へと新たな展開をたどり、また、さらなる抱握主体に包摂されていくというプロセスをわれわれは予期することができる。この内と外とはホワイトヘッドのいう両極的存在として捉えることができる存在の核的な存立状況であり、この両極は二元的にさえみえるのであるが、しかし、ホワイトヘッドはこの二元的存立態とみえる二者をあくまで両極として把握し、二元的とはみなさない。それは両極であってはじめて存在の核として作用していくことができる。そこには両極の両立があるとされる⁽²⁾。さらに少しく、この議論をわれわれのこれまでの議論を交え、解題的に述べておこう。

まずホワイトヘッドの理解による量子論を位相的場の理論の基底ともなる量子論に近接させて、延長的量子という観点からみることにする。彼は「量子においては、時間的要素と同様に、空間的要素がある。こうして、量子は延長的領域である」とする。続けて「延長性という特性をもって捉えられるこの領域は、合成が前提している決定された基底である」。「この基底は、新しい合成にとって可能である現実世界の客体化を、差配している」。このような「発生的過程……を支配している主体的統一性は、主体的指向の原初相とともに生起する延長的量子」を「全体として現実化」していくとされる。このような理解の元に、量子は、ホワイトヘッドが究極的にいうように「神から原始的に派生する主体的指向に調和している延長的連続体におけるその立脚点である」⁽³⁾。このように延長性領域が理解されるのである。

ホワイトヘッドは、このような立脚点の位置づけ、全存在に対して、核として存立を可とする上述した究極の実在たる神について解題していこうとする。両極性の考察は、最終的に神にまで至る存在の究極主体の議論に到達していくことになる。

ホワイトヘッドは、究極主体に向かうプロセスにおける人間経験に関する本質領域について量子論を用いて説述している。その概要を別稿で述べた引用を参照しつつ議論の起点としておく⁽⁴⁾。

われわれはかつて取り上げた山本誠作のホワイトヘッドに関する見解を参照する。ホワイトヘッドは「生命の動的展開をプロセスという形で捉えようとした」。彼の「プロセス思想」は「物理学領域から感覚領域にかけてその実相を明らかにしようとした」議論として総括され、この思想の内実において、上述もしたように「量子論」が考察の根拠とされる。「量子や光量子は、粒子性と流動性の性格」を持つ。この「量子はエネルギーを住まわせる個体的事実である」。その個体的事実は「一契機から他の契機への連続的移行において、エネルギーの流れを形成していく」。すなわち「量子は連続的かつ不連続であり」、「時間的であるとともにかつ空間的」な「統一体である」。量子論からみるとこのような性格を持つ統一体についての全体動向の理解が可能になる。こうした原理的考察のなかに人間の経験を当てはめて考えると、人間の経験的現在とは「過去を含み未来を予見」する内容を保持する。したがってそこには過去、現在、未来の「持続がある」と理解できる。「このような持続を通して、人間経験は、その都度、量子的個性を実現していく」。このように集約表現できる物理学領域における「時空的統一体としての量子に対応する状況」をホワイトヘッドは「現実的実在⁽⁵⁾ (Actual Entity)」ないし「現実的契機 (Actual Occasion)」として位置づけている⁽⁶⁾。それは量子の働きでありながらも、人間経験の流れのなかで捉えると意味形成にあたる人間経験の一（いち）としての存立態を構成する、と理解される。こうした態様把握の元で、人間存在に即する思考をしてゆくと、その延長性領域にある究極の両極性の間に、多様な両極が存立していることを明示することができる。その両極の両立が本稿における思索の課題軸としてわれわれが解き明かす内容となる。その両立の人間の現存在における一たる存立への道を支える、そのプロセスを可能にする道程たる作用過程を細かくたどっていく作業を次章からの課題とする。

2 両極性と二元論の類似性と相違性：二元論から離脱し両極論と両立論へ

ホワイトヘッドは二元論ではなく両極性の元に存在を捉えようとする。われわれは、この立脚点に立ち、ホワイトヘッドのいう抱握論と包摂論を対比させながら考察を進めていく。まず抱握論に触れておく。ホワイトヘッドは「抱握」を次のように理解する。「発生理論においては、細胞は、それ自身の存在の基礎として、それがそこから生起する宇宙の諸要素を我有化（ないし占有化）するもの」とされるが、その「我有化（ないし占有化）」が進行するそれぞれの過程が「抱握」と呼称される⁽⁷⁾。これに対して、包摂とは、二者の存立体を取り上げるとするならば、優位性を持った

存立がその元にある存立体を包み込んでいく、ないしその包み込みの過程をいうとすることができる。そこには包み込みの主体と包み込みの客体が存在する。しかし次に考察を進めるように相対主義的に存在を捉えるときに、包み込みは相互的となり包み込みの主体が条件によっては客体となり反対に客体が主体となるという相互性が成立する。関係性とは線のとくに直線を一方向的にたどるのみではなくこの相互的な動態が同時的に生じていく過程とも捉えうる。この同時的關係性を含んで総体としての状況を相互包摂ないし相互包摂態と捉えることができる。それではこうした動向はいかなるときに生じることになるのであろうか。現実態の動向を捉えるならば、単純な一方向性の包摂ではなく相互包摂という態様の方が包摂の現実としては一般的ともいえる。それは融合という表現で言い換えることもできる状態変化ないし動態である。愛という関係性、友情という関係性、流動物の相互の混ざり合い等、という例を挙げてみてゆくなればその有り様の一般性を明らかにすることができるであろう。そうした相互性が可能となる前提としては、融合していく両者の相互性の位置づけが重要である。そこに真の相互性としての融合が生じる為には、言わば平等性というそれぞれの価値づけが不可欠である。そこに平等性が存立せず、優劣とされる状況が存在するときに相互性は偏重をきたし、多くの場合、片方による包み込みに終わることになる。この平等基準については、一としての個の存立条件にかかわる福祉性との関連で再述することにする。平等基準のみならず、包摂体それぞれは、両者を超越した統合性の元にあるときに、その存在を確実なものとするのであり、その超越体の力動的作用に応じて相互包摂状況の動態が左右される。この統合作用を前提にする議論は「人格論」とも関係づけて後述されるがここでは対比的に検討を加えていく抱握との関係でのみ触れておく。

抱握 (prehension) 「理解による把握」、とはホワイトヘッドによると、上述したように、対象の「我有化」(ないし占有化)として意味の提示がなされている。我有化される対象は存在の「特殊な要素」としての内容を持ち、それは宇宙の究極的な諸要素に含まれるとされる。さらにそれは「既存の構造を持った現実的実在と永遠的諸実体である」として把握されている。この二者の中で、「現実的実在は積極的に抱握される」のに対し「永遠的客体」はその内の「選ばれたもののみが抱握される」とされる。こうみえてくると、抱握の位置づけにおいては、そこにあるそれぞれの存立体に比して、より高揚した位置にある統合主体が前提にされていると考えるのが妥当であろう。しかしホワイトヘッドはより慎重に意識や命題を取り上げてそのような単純化を避ける多様で複雑な相互性の態様を持つ主体的存立を示していこうとする⁽⁸⁾。これにより統合性及び統合主体の姿が明らかになっていく。

そのことを明確にすべく彼の意識や命題の議論に触れておくことにしよう。

上述の多様な相互性を明示しようとするかのように、意識の本性についてホワイトヘッドは、特に「意識への統合の始めと終わりの間」にある「命題的感じ」についてその成立を問う。それは「その客体的与件が命題であるような感じ」とされる。それ自身に意識は含まれないが、さまざまな形

態の意識は「命題的感じが、物的感じか概念的感じか,」「他の感じとさまざまな様態で統合されていくことで生じる」。「意識はこれらの感じの主體的形式に属している」。そこにいう概念的感じは、「現実世界の歴史が概念的感じの与件に特別な関連を持つ」故に、議論の余地無き原理的意味を持つ与件は、「その現実世界に関わりを持つ」ことがなく、したがって「この与件は永遠の客体である」と理解される。「永遠の客体が関わるのは」、定立されていない現実的實在のさまざまな様態の内の「純粹に一般的な任意の何かにすぎない」。すなわち「永遠の客体」はそれそのものとしては、そこにある各様の現実的様態あるいは諸時代の間にある「特定」の「任意の選択を避けようとするのである」⁽⁹⁾。

そこではむしろ経験に関する理解が重視される。「現実世界における経験」は、「冒険」によってのみその経験対象の特性を見出すことができる。任意の選択を避けながらも冒険によってその経験対象の特性を見出し選択が完遂される。これが「経験論の究極的根拠である」と、ホワイトヘッドはいう。こうして新たな實在についての考察に踏み込んでいくことになるが、彼は、その為に必須なのは「命題」についての考察であるとする。命題は二価論理においては真であるか偽であるかであり、したがって永遠の客体でも感じでもない⁽¹⁰⁾。この真か偽かは命題それ自身が関わる場所ではなく、「命題的感じを抱懐している主体」「命題の抱懐主体」のみが関わりを持つ。この一部として「判断主体」がある。つまり「永遠の客体」は「現実態と関係」し、「命題」は「論理的主語に関係する」。「命題の論理的な主語」が「真と偽に必須な所与性の要素を供給する」⁽¹¹⁾。その命題とは感じる主体を求めるとしての与件であるとみなすことができる。この与件こそが、高揚の主体としての抱握の原点にあると理解される。こうして抱握論は前方の究極への高揚と現実の各連鎖との間に成立する両極を基底にして多様に存立する延長プロセスとしての様相を明示することになる⁽¹²⁾。

こうして延長プロセスは抱握論によって支えられ、「主体から主体への前進」がたどられていくプロセスにおいて、ホワイトヘッドの表現にしたがうと、「この超越的創造の為の特殊な可能性は、拾い上げられ、停止され、情緒を帯びさせられる。こうした「命題的感じが重要であるような存在者の段階」というものは、「知性的感じを度外視する」という前提の元で、「ベルグソンの純粹な本能的直感の段階」に通じると理解されることになる。こうした経験の高次の諸相への考察は、「純粹な物理的な目的的な段階、純粹な本能的な直感の段階、知性的感じの段階」という三つの段階をたどることになる。ホワイトヘッドは、しかしこうした諸段階についての明示的峻別を否定し、「あらゆる度合いの重要性ないし非重要性を伴った、知性的感じが存在する諸段階がある。そしてまたより高次の段階においても、最終的満足（充足）において、物的であれ命題的であれ、それ自身の固有の特質のみ獲得する感じの全面的休息がある」としている⁽¹³⁾。

上述のホワイトヘッドの抱握論との関わりに添って、彼の「過程と實在」第四部の「延長の理論」の概要に触れておくことにする。

現実的実在を満足（充足）するにあたり、それを構成する感じを区分する在り方が、二つあるとホワイトヘッドはいう。その二つとは「発生的区分と整序的（形態論的・延長的）区分」である。前者は合成に関する、後者は具体的なものの区分である⁽¹⁴⁾。

上記の発生と整序性についての議論から、われわれはより広い問題解明へと進むことができる。それは抱握論が拒否する二元的分裂の具体的理解に関する諸事であり、さらにその考察は現実態の二元分裂的把握の広範な否定性に向けられる。例えばその議論は公共性と私性に関して適用可能である。事実そのものにとって彼方のその存立との関係によって理解可能な要素をホワイトヘッドは世界の公共性とする。もう片方の事実そのものの直接的かつ私的個人的な要素を「個体的私性」としている。前者、公共性は「自己超越体」であり「公共的事実は整序的である」。後者、私性は、現実的実在との関連でいうと「主体」であるとされる。「それは自己享受の発生素素」といえ、また「公共性という効能において手元にある素材からの、目的論的な自己創造」のなかに形を得ると理解される。この公共性と私性の対立は、永遠的実在への進入形態の機能類別によって明確化できる。まずそれは、①「感じの与件たる客体化された結合体」であるか、あるいは「単一の現実的実在の限定性の要素」という態様を持つ。次に②「感じの主體的形式の限定性における要素の類別」において、最後に③「概念的ないし命題的感じの与件における要素」として。いずれの態様が永遠的客体に全面的な開きを持つかをホワイトヘッドは問い、「永遠的客体」を「客体的」種と「主體的」種に分けることを提起する⁽¹⁵⁾。客体的種の永遠的客体は、上記①において「進入を獲得」する。それは「無制約な実現において、当の主体に属する感じの与件である現実的実在ないし結合体の限定性における要素」とされる。主體的種は「その原初的性格において、感じの主體的形式の限定性における要素」とされ、「それは感じが感じうる決定的な要素」「一つの現実的実在の感じの主體的形式を限定する」とみなされている⁽¹⁶⁾。

このような位置づけの元に、「発生的区分は、その合成的直接性の性格における現実的契機に関わり、整序的区分は、その具体的客体としての性格における現実的契機に関わる」とされる⁽¹⁷⁾。

この現実的契機についての結論からの展開により、ホワイトヘッドの論は延長論上の結論へ至り、「物理的場の全理論は、現実的諸契機の個々の特殊性を、体系的幾何学の背景に折り合わせる」という議論を構成していく。「この体系的幾何学が表現しているのは、合成を制約する原初的でリアルな潜勢態を構成する広範な宇宙的社会を貫いて継承される最も一般的な『実体的形相』である」とされる。こうした理解をベースにホワイトヘッドは次のような「体系的幾何学的関係」を提示する。まず、現実的契機の不動性に関すること。次に述べられる延長における量は理論的構成物であり、それは重複することなくそこにある結合体の網羅的合同的単位の数の表現である、ということ。いうところの合同とは、そこにある両方の要素を包括する体系的複合機能の一定の類比と定義される。また実験的測定においては、使用器具の初期と後期の間にある合同状態について究極的な直感による把握がなされる。次に全てにおいてなされる精密な観察は全て現示的直接性による知覚がな

すものである。こうした知覚は私的な心理的場のみに関わるものではない。さらにこうした知覚は、外的同時世界を「身体」との体系的幾何学的関係についてのみ示すという⁽¹⁸⁾。

こうした諸契機の総合性のなかで、現実的実在はその存立する世界を構成するエネルギーの流れを秩序づけつつ統合性を保持する延長の継続に至る。それは世界の終わる時まで、あるいは終わりの超克を経た究極まで続くことになる。その可能性の追求については、永続の延長として、いまここでは現実における統合への延長過程を在るとして位置づけておくのみである。

このような超克の連続において対立が両極を形成しようともそれは延長のなかで両立を果たし、両立の実在はその様態のなかにおける潜勢態を見出してゆき、遭遇の対象として立ち現れる超克状況に向かい続け、延長の継続の道をたどっていく。この章においてはホワイトヘッドの抱握論、延長論の結論部分を概括的に用いて議論を構成してきたが、以後の諸章のなかで、その内実を議論の適所において用いて理解を広げる試みをさらに進めてゆきたいと思う。

こうしてわれわれは、ホワイトヘッドの論を念頭に置きつつも、それにさらなる議論を加味してわれわれの論点を追求すべく、次章における相対と絶対の問題に論を進め、全体論のなかにおける両極の存立を議論の対象とする段階に到達する。

3 相対主義と絶対主義の対立構造を越えて：両者の全体的存立の可能性解明

われわれは両極性を主要テーマにして論を進めてきたが、そのような両極性について語るときに、断絶にせよ相互性にせよ二者のさまざまな関係が、相対的存在状況を前提にしていることはいうまでもない。ここでその相対的状况に関わる考え方に少しく触れておく。それは相対主義と呼ぶことのできる状況把握の在り方である。サンキー（Sankey, H.）は相対主義には5つの多義性が内包されているという。①合理性あるいは合理的信念についていわれる相対主義、明確な合理性は把握できず、相対的にしか合理性を示すことができない。②真理についての相対主義、真理について明確な断言をなし得ず、何かに対する真理でしかない。③認識論的区分に関する相対主義。ここでは二者の混成としての認識が妥当とされる。④存在論的相対主義。存在は相対的にしか成立しない。⑤同じく存在論的相対主義であるが、この場合、そこに矛盾を含み論脈が成立しない。そうした定立のない関係性のなかの存在⁽¹⁹⁾。

こうしたサンキーのいうような相対主義を例示的に見ても、そこに相対主義の定立ないし相対主義的な把握の拭いがたさとともに、その困難性が存在することが明白である。多くの論者らは、これを絶対主義という方途によって、あるいは多義的な相対性のいずれかを採用しそれを真とすることによって乗り越えるべく方法論上の立論を試みてきたのである。しかしそこに合理性を発見しようとする試みは、合理性そのものの問題視にも影響されることによって、科学哲学上の妥当性を問題視することに結果し、方法論上の妥当性、新たな方法論上の根拠づけを問うことが要請されるこ

とになる⁽²⁰⁾。それに応える為には、合理性を判断するとき、どのような対応が採用されるのかという採用基準の吟味が必須とされる。また行動主体の目標あるいは目的はいかなるものであるか、さらに可能な行動のあり得る結果についての判断上の背景となる価値観がいつも考慮されねばならない。ラウダン (Laudan, L.) はそうした考慮すべき諸点を強調し、近年多用されている科学的方法論の、いわゆる「自然主義的方法論」を取り上げ、そこにある方法論に関わる認識論を問う。彼は結論的に、そこにある法則性ないし原理の組み合わせを明らかにしようとする。ラウダンによれば、それは、高度に一般的なものから非常に特殊なものまで幅広くあるとされ、次のような典型的に方法論上の規則性が含む内容の問題状況が列記される。①単なる偽りの理論、②既知の事柄の説明を越えていくよき予測を求めようとする諸理論、③人間の課題への実験的対応を目途とする実験的技術を探る論、④多領域における成功理論で分析できない諸理論の否定、⑤観察できない実体を仮定する諸理論を避ける論、⑥原因に関する仮定を検証できるようにコントロールされた実験の採用に結果する論、⑦一貫しない諸理論の否定としての論、⑧複雑な理論より単純な理論を採用しようとする論、⑨これまで提示された成功例ではなく、新たな理論を受け入れようとする論。列記されている各様の問題を含む諸論は、いずれも探求者の問題対応における恣意性を突く内容である⁽²¹⁾。

ここに示された、いかにも日常的にわれわれが陥り易い恣意性に彩られた諸事項のそれぞれは、実証的であろうとするわれわれの科学的方法論上の視点にさえ、相対主義が張り付いていることを示してあまりあるといえる。

この問題点の列挙は、ラウダンの著書「実証主義と相対主義を越えて」という題目に示される合理性からの離脱方途たる道の明示へと進む。そこに示されるのは、「合理性ではなくプロセス(過程)である」。さらにそれは「伝統の再構成」という表現によって示される。彼は「認識論や哲学の部分」が「全体として未発達」のまま据え置かれており、その打破を提示⁽²²⁾する。そのために「事実気づく為の充分条件」「ありのままの状態の後ろにかくされた」事柄・態様といった内実に目を向けることを重視するとともに、その為にも科学の過去が合理的な重みを持つことの重要性を指し示そうとする⁽²³⁾。

以上のように要約的に触れた内容は、本稿の主題に関わる認識論上の議論、相対主義への疑念を含んだ考察であるが、われわれはこの単なる合理性を求めることなく、固定した実証主義に偏ることなく、相対主義のみに依拠することなく、しかしあくまで科学的(機械論的科学主義ではなく)であろうとする道をこの章の考察として提示していこうとする。

それを、ホワイトヘッドの思想をベースにおいて、両立としての相対的な関係性を形作るそれぞれが、この両極の両立を包括する連続的全体のなかにあるという意味における相対的存立の全体的方向性を前提にした思索を本章の課題として深めていくことにする。

すなわちそれは、両極論を主軸とする議論となるが、その両極が、それぞれの存立を確実にして存立している。そうした両立を可とする状況にあるときに、そこには両立を許容する作用が存在し

ていると考えることができる。その作用性においては、その両立への指向作用の内在的な存立があるといえるのである。さらにその指向作用が、作用の極としての両者に内在するという点については、上述のような議論とともに、さらにはその作用との関係性に外在的に関わり、両極を両立させる統合作用が明確に存在することに注視すべきであろう。そこにある内在指向性と外在的な作用が、プロセス哲学的に存在性を有機性のなかに捉えていくことができるとすれば、一定作用の全体性そのものを位置づける様態が見えてくる。そこには延長論的な理解が可能であり、その元で、究極の両極を存立させる核的存在を位置づけることができる。それを絶対と呼称することもできよう。そこにいう絶対とは、究極を支え、それを位置づける究極に他ならない。それは絶対統合として、プロセスのなかに働きかけ続けるという力であり、統合的作用力として認識することができる。その究極の存在は、あらゆる要素的存立に働きかけてそれを統合へと収斂させてゆく。そこには、全体の要素領域を経て各様の構成体としての位置づけからその働きを全体のなかの部分としての存在の全てに幾多の段階を経て作用を及ぼしていく作用力の存在を認識していくことができる。その存在は物的ではなく、したがって認識の対象たる事象や物体として捉えられるものではなく、あくまで作用ないし作用力であり態様としてある実在状況としてしか認識できない。さらにその作用力は、部分から全体へと波及していく被統合力の働きを作動させ収斂へと向かう。そこにおいては統合作用を前提にし全体の作用とするのみならずその内に存在する部分との関係を問うてゆかねばならない。それは、上に部分から全体へと記したが、実際は、そうした直線的な動向ではなく、全体と部分との相補性のなかに動向の進展があるとするのが妥当である。量子論の相補的性向を持ち出すまでもなく、動向上の前進の基底にあるエネルギーの作動のなかにそのような統合性の作用と応答的部分の作用性が相互に影響を与え合うという態様の連続を、前章に述べた部分における延長の動向のなかにその持続を課題とする目的的推移故に見出すことができる。この目的性の存在が統合性との間に繰り広げる相互性のなかで意味形成的な延長が継続されていく。その相互性は単なる機械論的な瞬間の連続ではなく、そこに意味の連続たる意味的統合が築かれていく。それは相互包摂ということのできる全体の統合作用と部分の多様な意味的実在の総合化に他ならない。そこには意味形成的な相互包摂を発見していくことができる。しかし、統合からの離反により相互性が成立し得ず、包摂の完遂に至らない場合も当然想念さるべきである。包摂の拒否・断絶から破壊への道程がどのような手段によって避けられるべきかが、存在の究極において、したがってそれと連関するプロセスにおいて、いつも問われ続けている。このとき統合力としての究極にある神は究極の究極からあるべき道を指し示している。それをどのように受容していくかが全ての部分的存在の個々において問われ続ける。絶対はあくまでも実在としてあるが、包摂については、そこにあり続けてもその完遂をなす部分としての存立実在の有する受容力に依拠するのみである。その受容力の成長が存在の段階一段階の自立性、歴史性に現れるかぎりにおける主体性への道となる⁽²⁴⁾。

そこに想定できる相互包摂故の相互指向の存在は全体を構成する部分のマクロ的広がり

ある無限の部分的実在としての存立であり、そうした収斂動向の無限なる前方の存在とは、究極の実在としてのみ捉えられる存在であり、部分を内包する、すなわち内在する究極のミクロ性を全体包摂する作用統合力として想念される、そのような実在そのものである。そこに絶対性を持った核が物的核としてではなく作用力として確実にあるとすることができる。その力をわれわれは神として認識することができる。

ここでわれわれは少しく説明を差し挟んでおかねばならない。ラルフ・ガゾ (Wolf-Gazo, Ernest) 編集による論集「関係性に見るプロセス：新ホワイトヘッド派のパーспекティブ」(Process in Context, Post-Whiteheadian Perspectives) においてジョージア (Georgia, I. L.) は、ホワイトヘッドの哲学によって、物事の本質概念の解明や科学の発展に添った考察がなされ、究極性への扉を開く努力が進められ、宗教にとっても意味深い結果をもたらすことになったとし、それを根拠に「神学や宗教に対する新しい哲学的基礎の必要」を説いている。その新しい基礎による「本質的両統合を可能とする物事の本質についての新しい哲学概念」の道が必要であるとする。彼は、ホワイトヘッドの哲学のなかにそうした本質提示があるとする⁽²⁵⁾。それは、「永遠的な客体、数学的プラトンの形態のみならず、世界の歴史におけるある接点の現実化の為の顕在性としての質的全てでもある」とされ、ホワイトヘッドのいう「現実的実在」がこれであり、まさにホワイトヘッドは、この現実的実在 (actual entity) を神とみなしている⁽²⁶⁾。

全ての統合作用の核として全てに作用する神は絶対である。しかし、この絶対とは、全体のなかの内在要素としての物的世界における部分性からすると全体を統轄する部分でしかない。それでも全体に及ぶその作用、最終作用である実在は、つまるところホワイトヘッドの表現をもってすれば、神の「結果的本性」と呼ぶことができようが、そうした神のその位置は絶対と見ることができよう。この神の結果的本性のイメージをホワイトヘッドは「神の無限の忍耐」そして「救済」という表現で表している⁽²⁷⁾。

このようにあくまでも相対主義的にしか捉えられない世界の関係性も絶対という全体のなかに包摂されて存立している。それは部分として無限の多様性を持つ全体の構成要素からなる構成の態様を持つとも見ることができよう。したがって、部分の位置から捉えるときに全体は部分との間柄において相互性を有しており、その位置から見るかぎり部分はそれぞれの部分同士の間において相対的であり、全体はその統合力的観点に立てば絶対であるがその浸透力の行き渡りは部分全体に及ぶものの、部分の各存立体及び部分の各様態から全体を仰ぐときに全体は部分に対して相対的に存在する全体という名を冠した部分であるとも見ることができるのである。そこには全体と部分の相互包摂があるともいうことができる。ところでそのような全体であるのであれば、行き着く究極的な位置の想定が可能であれば、またその位置を結果的本性の場として位置づけることができるのであれば、その始めに無限に遡った先における位置を含み込んで始めて全体の名に値するであろう。それは、始めにあって全ての共通項となる⁽²⁸⁾。したがって「その影響は、純粹の多様な他の創造性

についての万有の性格を与える」。それによって「永遠の客体の現実化から世界へのプロセスは純粹なカオスではあり得ない」。ホワイトヘッドはこれを神の原初の本性としている。ホワイトヘッドによれば、神の結果的本性は「世界のプロセスの終わりのない状況と考えられている」⁽²⁹⁾。これは上述の見解をベースにおいていうならば、「無限の忍耐」と「救済」の永遠性とそのプロセスを抱握していく抱握主体ということができるであろう⁽³⁰⁾。

神の原初の本性と結果的本性という原初の指向性と最終的な全体的抱握という統合性への作用の連続のなかに作用プロセスがその高度化を伴って現実的実在としてのエネルギーの態様を存続させていく。その態様は神の本性の絶対に包まれて、無限の多様性を持つ部分への浸透を受容しながらしかし部分の独自性の存立を許されて存在の一へと進み、永遠的客体へと高揚し、そこにおける永遠への奉仕を可とする選別を経て延長の継続がなされていく。

4 両極における相互包摂への指向動向

前章に述べた包摂の最終主体としての全体における統合主体は、抱握の連続の元に成立してゆき、究極の究極としてあり全体を全体として成立させる意味と統合性を持つ力（エネルギー）であるといえることができる。そのような関わり、すなわち作用における究極への統合作用として絶対は存立しているのであり、したがって部分からみると、全体とは、そこに内在する個的部分の意味的延長という連続態として、究極的な部分の受容という「意味」の現実化あるいは具体の現出そのものということになる。

ここで前述した二元的としてしか捉えられないかに見える、あるいは対立するかに見える二者たる両極を取り上げてさらに議論を進めよう、上にも例示的に取り上げた「公共性と私性」の二態様を再度例示として用いる。世界の公共性という全体的視座から見ると、私性は部分的であり、ある場合は公共性に反して私的利益に捕らわれるという焦点の離反が顕著になる。この両者が両極に終始することなく両立、しかも相補性の元で相互の存立を図るときに全体と部分の相互包摂が可能になっていく。この可能性をたどることにより、私性を公共性の元に真に生かすことのできるプロセスが築かれていく。そのプロセスという延長への道は、抱握論の発端部分の議論として前述された。その経緯について、それがたどる道筋をさらに踏み固める議論をしておきたい。相互包摂の延長とその継続が、人類への進化段階における偶然性の作用的経緯をもそのプロセスに含みながら、何らかの指向性を高度化の流れを伴いつつ内在させ、さらなる主導的高度化へ至り、その指向性の有り様により究極の統合性への道に包摂されていくように展開がたどられる。この統合性への指向性が人間存在の現実にとっては最も重要である。この動向のなかで現実的実在は、その作用動向を意味的に整序していくことができる。そうして究極への合成を可能にしていく。現実的実在の収斂としての一への道、その永遠的客体化による新たな一への高揚した延長のプロセス。それはそこにある

意味形成による。それが永遠的客体における存立の際の選別（ホワイトヘッドは、これを主体への道の「未決定の除去」とも理解している。）ということにも通じるのであるが、その選別とは例えば上に述べた公共性と私性の相互包摂という動的営みのなかでなされてゆくことになる⁽³¹⁾。私性は一たる存立プロセスにおいて、その公共性への道程を進みそこに高揚した主体への抱握が可能になってゆく。抱握は高揚の意味的我有化という主体への道であり、主体性の高度化ともいうことができる。そこにいう主体化とは公共を全体として捉えたときのその全体への埋没ではない。それは個・共同の作り出す公共による共生状況を意味する。

両極性に関して、少しく範囲を広げた考察を試みておく。真と偽、善と悪、というような両極概念における両極に関する考察に言及する。特に両立との関係はどのように考えられるべきであるのかに焦点を絞る。公共性と私性という両極においてはその相互包摂は一般性をもって捉え易い。公共性は私性をその成り立ちと展開において助長し、私性は公共性の成り立ちと展開に包まれながら強化作用によってそれを助長していく。これはまさに相互包摂の関係性として捉え易い態様の相互性である。しかし、真と偽、善と悪というような事柄には、相容れない対立がその神髄において存在していく。そうした関係性において両極と両立とはいかなる在り様として理解できるのであろうか。相反する両者はまさに両極である。両者は他を互いに否定する。関係事項は後に考察するが、少しく先取りして述べておくと、統合性という指向作用の焦点の元で両者は全体性のなかでその位置づけを有し、統合性基準に即する作用対応がその生み出しの内部に他方を包み込むという結果性へ至る。それは絶えず流動的であり、統合性の内容次第でその性格性が異なる。しかし結果的に総合体の真なる様態が統合性を可とし、統合性の善なる存在が統合性を可とする。この後者については、特に福祉価値との関連付けの元に後述する。この統合性の全体内における統合指向の作用により両者は流動的に相互に包摂し合いながらその指向性の貫徹の方向で相互包摂と両立を可能としていく。統合性にとっては、偽が真なる方向性の判別を明瞭にするという役割を持つ。統合作用において真への指向性が、偽を手掛かりにしてそれを克服しつつ、統合の延長への永続性を確実化する術ないしそれを支える意味を見出してゆく。真と偽とは真の直進ならずとも、偽の存在によってそれを真に包摂していくなかで、その真を強め確実化し、偽から真への道を強固に具体化していく指向の道を意味的内実にて即してたどることができる。また善と悪についても、上に述べたと同様な指向を前提にしたプロセスを見出すことができる。ここで悪についてはホワイトヘッドが指し示す論について短く触れておきたい、彼は、「悪の本性は、事物の性格が相互に妨害し合うということである」とする。「こうして、生命の深さは、選択の過程を必要とする」。この過程が、悪の除去や廃棄に繋がっていくことになる⁽³²⁾。そこにおいては悪が善なる態様の判別をなす基準を指し示す為の役割においてその有り様の意味を発揮する。これはその命題の感じと命題そのものさらには倫理性の判別命題としての役割上の相互性という媒介的な包摂性を発揮しそれ故の概念上における両立がそこにはあるという理解をなすことができる。しかし、その両立は「除去」や「廃棄」の進行に

伴い統合化の元に総括されていく。いかなる対立関係においてもこの関係性をその全体性に浸透している統合性基準の存在の態様（われわれはここに福祉基準に照合するという前提を重視する）に照らすことによって、その両極性における両立性がその存立を露わとする⁽³³⁾。それはそこに働く指向故の統合への寄与動向次第で決せられていくのである。

ここで再び公共性と私性の問題に添って少しく問うておく。その二者の前方にある歩みをさらに見てゆくと以下のようなホワイトヘッドの議論がわれわれを導いてくれる。

ホワイトヘッドは、事実そのものが彼方の存立とどのような関係を持つかによって、「理解可能な要素を世界の公共性」として位置づけている。それは「自己超越体」であり、また「公共的事実は整序的である」とする。もう片方の極にある私的個性は、現実的実在との関連でいうと「主体」とされる。さらに「事実そのものの直接的かつ私的・個人的な要素を個体的私性」とする。このような内容が意味をなす。こうした公共性と私性の関係性は、永遠的実在への進入形態の機能類別によって見ることができる。ホワイトヘッドはこの機能類別により、いずれの態様が永遠的客体への開きを持つかを問い「永遠的客体」を、「客体的種」と「主体的種」に分けることを提起することは前述した⁽³⁴⁾。こうして、一たる個の客体化の進行から永遠的客体への歩みが、その私性としての個的存立とされ、これをホワイトヘッドは主体としてみている。われわれはこれを主体化への道にある態様として位置づける。主体そのものよりむしろ永遠的客体への開きの強化による実在性への歩みとする。この推移プロセスのなかで永遠的客体が発生的状況から整序的状況へと移行していく。その移行により、その公共性の度合いを強めていくと理解する。こうして前方の統合主体への道程が可能となる延長が、あるいは延長的結合が可能となっていく。

このような論点からの展開により、「発生的区分は、その合成的直接性の性格における現実的契機に関わり、整序的区分は、その具体的客体としての性格における現実的契機に関わる」とされる⁽³⁵⁾。

ホワイトヘッドは、上記延長について、「延長」は「延長的結合」によって理解さるべき、とした上で、「延長は結合性の諸現実態間の関係の形式である」とする⁽³⁶⁾。この関係の形式を探ることが、われわれの本稿における課題でもある。存在の両極性が、いかにすれば関係の形式を保持しつつ延長を可能にし、結合の段階をたどっていくことができるのか。われわれは、この段階を福祉形成の道として捉えていくことにより、一たる人間存在の存立とその客体化による次なる段階への道に連続していくことができるとする。またさらに段階は高揚をたどり続けることができるとする。議論は両極性の存立において作用動態としてある指向性を媒介にして進行する相互抱握へと続くが、そうした全体性のなかの内なる動向ないし作用解明に力点を置いた考察に加え、その動態において全体性の側からそのような動きがどのように捉えられるのかをみておくことにする。その為にはボーム、D. の見解を導入し理解を深めておくことにする。

5 相互包摂動向のなかの全体と部分の存立：D. ボーム 「全体性と内蔵秩序」における論拠の検討

他稿にボームの「内蔵秩序論」への反論を記した。それと、一たる存在の継続による永続への肯定意見とを関連付けて論を進める。すなわち全体性の永続的拡大を前提にしてこの章の議論を進めていく⁽³⁷⁾。

ボーム, D. は、全体が部分と内的に関係づけられており、全体により部分が包摂されるとともに、それ故に部分も内的相互性をもって、全体との関係性ほどの強さはないものの、関係づけられていると主張する。彼は「外的関係性」という用語を用いて、その状況が包み込みという展開的な秩序のなかに示されるという。XとYとの間の関係Rは、もしyに対する同じ関係Rのなかにxが存在しているとすれば、それは外的であるとする事ができる。このような関係性が次のような例示で説明される。テーブル及びその上のさまざまなものにおける関係性を考えてみると、ランプ、本、電話といったテーブル上のもは皆相互の関係づけのなかにある。しかしながらテーブルが物の一つを除去したとしてもテーブルとその上のものの同一性の変化は生じないし、その他のものとの性格も変わらない⁽³⁸⁾。

このように、事象の関係性を見ることによって事象の本来の様態を明らかにしていくことができる。こうしてその事象が把握されるときに、それは固定して捉えられることはあり得ない。事象の把握された内実をそこにある「事実」としてボームの主張をたどるとき、一見すると把握できる秩序、度数、構造を、事実として位置づけることができるかに見えるが、ボームによれば、その事実そのものはわれわれによって作り出されたものであるとされる⁽³⁹⁾。こうした見方は、物事の関係性が外的であるということに目を開かせてくれる。そこにある事実は「包み込みを解かれ、展開されていく秩序のなかに示される」。このことは事実についてのボームの見解に明瞭である。「事実 fact とはラテン語の *facere* に見られるように、『作られたもの』にはかならない⁽⁴⁰⁾。人間存在が秩序、度合い、構造といった現実状況を知覚によって捉えながらも新たに作り出していくことにより事実が作られていく。われわれは事実を創作しながら理論としてそれを元に何かを形成しようとしたり、その意味をさえ創り上げていこうとしたりする。さらにわれわれは観察機器を新たにし、実験結果を精密に分析し、創られた全体のなかの事実を探り出していこうとしてきた。ここには理論の秩序への適合が見出されるかも知れない⁽⁴¹⁾。しかし、ボームは次のようにいう。「秩序は」、「対象や事象の規則的配列として理解できない」。「むしろ時空領域のそれぞれに、ある陰伏的 (*implicit*) [内蔵する (*implicate*) ことから展開する状況を示す用語として理解] な意味で、全体の秩序が含み込まれている」。ボームはこの営みをテレビ放送における電波が運ぶ視覚像、また受像機との関係で説明している。「電波が運ぶ内蔵秩序としての視覚像が、受像機によって *explicit* される」⁽⁴²⁾。ボームはこうした類例をさらに引きながら、顕前秩序以前の内蔵秩序へ目を向けることを提唱する

のである。物理学がこれまで重視してそれに基づいてきた顕前秩序は二次的な意義を持つべきだとする。その論拠として彼が最も重要視するのがホログラムの働きである⁽⁴³⁾。その「本質的特徴」を、「被写体の構造全体の秩序が、おのおのの空間領域に『包み込まれ』、光の運動のなかで『運ばれる』こと」とする。電波と信号の例示もこれと同様のこととして理解される。そこでは、「意味ないし内容として、『包み込まれ』、『運ばれ』るのは、秩序と度数とされ、そのことそのものが一つの構造の生成と理解されるのである。ボームはこのことをさらなる一般化の元に、「内蔵秩序を『運ぶ』ものは全体運動であり、それは分割もされぬ一つの総体である」とする⁽⁴⁴⁾。この全体は、限定された、特定の秩序によって定義されることもない。それは relevant から派生してきた elevate という語の持つ、上げる、引き上げる、その結果 relevant (妥当) とされる、という意味の把握に通じる、とボームは用語上の説述をしている。こうした動態に、ボームは、「空間中に連続体として運動する一つの『固』体」を見出す。この動態において、「運動の全体の秩序は」、「直接知覚される相に見出される秩序と相似である」と断言しながらも、「運動のより大きな秩序を概念化していくことから出発」する在り方を提起するのである。これは「直接知覚の内に位置づけられるいかなる秩序とも相似的でない秩序を、概念的に提示することから出発する」ことになる。この視点に立つと「二つの秩序の交点」の把握を求めることに繋がる。それは「知覚的接触を可能にする運動の秩序と、知覚内容の細目を定める運動の秩序との交点」を記述しようとする試みとなる⁽⁴⁵⁾。ボームは、こうした運動の秩序が、「量子の文脈」のなかに見てとれるとする論理の構築へと進もうとするのであるが、しかしそこには新たな全体が姿を露わにする。それは新たな全体の一つの層を形成する全体がそこにあるに過ぎず、そうした「新たな全体」が「次々に現れる一つ運動」がそこに「全体運動」としてあり、そこに法則があるとするならば、それは「implicit (陰伏的)」としか、いいようがない⁽⁴⁶⁾。

この implicit な状況は、定まりなく、限定性をそこに見出すことができない。またその全体性と流動的關係のなかにある内蔵秩序はその全体とともに implicit であるとしかいうことができない。ボームは、彼の著書「全体性と内蔵秩序」に述べる論と近似する論としてホワイトヘッドのプロセス論を取り上げ、両者の類似性と両者がやや異なった方途で論を展開しているとわずか数行を用いて述べている⁽⁴⁷⁾。ピルカナン (Pylkkänen, P.T.I.) はボームのいう内蔵秩序が静態的ではなく、本質的にはダイナミックであるという。そこにおいては変化が発展の継続的なプロセスを形作っている。このような動態において全体運動が最も一般的形態とされ、こうした議論は、ボームの存在論の基底をなすものであり、これはヘラクリタスからホワイトヘッドに至るプロセス哲学の伝統に結びつくことを明確に述べている⁽⁴⁸⁾。

次にボームがいう上述の異なった側面についてホワイトヘッドとの対比を交えて触れておこう。この異なりは全体性とその内部に働く力動性の秩序的側面の違いに留まらず、もっと根本的な側面にまで及ぶ。それはボームの議論を集約すると、全体による包摂論と内包される側面との流動化論、

及び特にピルカナン (Pylkkänen) の指摘にもあるように一般的全体の動態的包摂体による内蔵秩序論であるといえるのに対して、ホワイトヘッドの場合は一の客体化の無限ともいえる展開継続があると同時に、そこには秩序としては捉え難いプロセスがあり、一における独立性とさらにそこに浸透する統合性の永続的存在が抱握の永続の元に延長されていくことがその特性として見出しされる⁽⁴⁹⁾。それは永遠への道としての無限性の元に行く営みではなく、そこにはあくまで確実にある一が客体化されていく抱握、ないし我有化(占有化)の連続のなかにある主体の統合作用が表現されている。こうした在り方によりボームも否定する機械論的な科学論ではなく、真に概念と物質が両極ながら両立し相互包摂してゆくことによる方向性が描かれることになる。それは統合作用という作用であるとともに愛という神の内包する存在への働きかけであり意味付けともいえる。また強いていえば生命の吹き込みでもある。したがってわれわれは、ボームのいう全体性と内蔵秩序の論に大きな示唆を与えられながらも、ホワイトヘッドの論に全体という概念を柔軟に導入しながらその作用的全体の浸透という形で、抱握される一たる存在存立に至る客体化、その連続という全体作用の広がり把握しボームの論を越えていくことができると考える。それはいかに流動性の状況としての全体性やその内なる秩序であったとしても、ボームの論には、そこに存在する前提状況として見逃すことのできない構造化や固定化があり、それを完全に払拭する論理を見ることができない。それは現実の物的状況という言葉ば内なる全体にその科学的視座に限られるという事態を招き、それ故に十分な全体性の開きに達することができない。これに対しあくまで前方からの統合作用が両極の存立に働きかけ続け、このように絶えず開かれた前方からの統合性が作用し続けるという両極性の永続性を有するホワイトヘッドにおいては前方に開かれた論をみることができ、それによって永続的営みとそれを可能にする主体を看取し続けることが可能となるのである。ここにあるのは極めて宗教的な立場の表明である。その宗教的立場こそ機械論的科学主義を真に乗り越え、永続する延長のなかで高揚の永続を確保する論理の要を形作ることになるのである。

6 全体性の作用統合化に向かう流動的存立基盤

「現実的實在」の動的営みを解明していくと、ホワイトヘッドが人間の一たる存立への営みの続行を基本として考察を進めているのが理解できる。それは現実的實在が一存立体の営みを完遂させ、その分析的対象化の結果をそれぞれに位置づけていくプロセスに他ならない。その対象化は、個別の存立に対してなされ、一たる存在の位置へと動態的連続が継続されていく。しかしこの動向への対象化の営みは個的存立を過去に向かって客体化することに終始するものではない。個的営みとして物的世界に固執ないし固着し、そうした状況において閉鎖的であることを選び取るものでなければ、それは絶えず前方志向の営みであり、前方の目的性の核としてある統合性の作用を受け続けていると考えざるを得ないのである。そこには過去から未来へ向かう耐えざる意味上の指向性が価値とし

て作用し続けている。偶然による存在実体の形成をそこに付加的に考えざるを得ないとしても、少なくとも上述の価値指向のなかで、生じた偶然をも包み込む方向をたどる営みがあり続けたと理解することができる。他稿で述べた表現に依拠するならば、そこには「プロセス上の統合性」ないし人間においていうならば「人格主体」「統合主体」の「内在がある」とみることができる⁽⁵⁰⁾。われわれが参照してきたシェーラー流の人間把握における二元論とされる説⁽⁵¹⁾(われわれの立場からすると本稿における両極論)によるならば、「自我論」と「人格論」の相互性を個々においてみてゆかねばならない。現実的実在とは存在の全てにそうした存在性を見ることができるが、ここでは人間とそれを取り巻く人間世界を対象としておこう。そこにある自我領域において客体化され把握されていく存在が分析解明の観察可能な領域を広げながら客体化の営みを延長領域のもとに位置づけていく。自我領域を研究してきたこれまでの科学手法は、そのほとんどがいわゆる機械論的科学主義と称される在り方であったが、このような科学では物的科学領域とでも呼びうる科学の一面性を保有するのみにしか過ぎない。ホワイトヘッドのいう科学領域とは宗教をも含み物的把握に終始する限界を超えていく手法であり、そうした領域全体への視座であり、そのような視点で捉えるならばそこにいる科学領域とは、またそこにある客体化される内容とは極めて流動的で限界性の打破と無限への挑戦を内在させている、と理解することができるのである。したがって、このようにみえてくると、シェーラーのいう客体領域とホワイトヘッドがいう客体領域とは明確に区別されなければならない。前者の客体とは物的固有性を持つとして把握されるのに対し、後者は永遠的客体とホワイトヘッドが呼称する有り様を意味する客体へのプロセスを表現している。したがって、後者は一たる存立への道にある存立態であり、流動的に統合性に至る前方からの力動的営みとの相互作用による存在態様である、あるいは目的性ないし指向性との間における揺れないし流動状況のなかにあるというそのような客体である⁽⁵²⁾。

われわれはこれを流動的状況というプロセスの継続のなかでの客体化という動的営みのなかでの客体存在という性向を注視し「流動的客体」として認識する。シェーラー、M.の自我領域における客体への視点も厳密に見てゆくならばこの流動的客体に他ならず、したがって、ホワイトヘッドのプロセス論的思索を受け入れる余地を、すなわち人格主体へのプロセスを内に含む論であるとして理解する側面を十分に持つことができる。こうして人格論と自我論はその両極性を明確にしつつその両立を志向的な此方からの営みと統合的全体からの力動的な彼方からの営みの相互的存立として全体の姿を想念できるものとなる。ここには全体的作用流動化に向かう作用基盤がある。ところで、この作用についてさらに語らねばならない。ここに示してきた作用とは機能における流動的内実であり、構造化されずあらゆる可能性を内に含みながら前方と名付けられる継続の延長をたどり続ける動的営みである。したがって構造化の一定の枠付けをもって語られることなく多様な自由性をもって捉えるときに統合作用としてその営みを表現するのが妥当とされよう。人格性とはこの統合作用として最終主体たる究極へ至る道をたどる故に「人格主体としての統合作用」と呼ぶにふさ

わしいのである。

再度の確認になるがわれわれはホワイトヘッドのいう「現実的實在」を量子論的前提の元に議論のベースに据えて立論を試みているのであるが、この量子的広がりの中で論は、さらに人間に視点を当てる脈絡を創るプロセスをたどって進行していく。その人間領域における営みの原点をわれわれはこれまで「人間福祉学」という名称の元に求めてきたのである⁽⁵³⁾。その学的試みを作用統合化という神の結果的本性との関係性において、言わば相対的に求めてきたとも受けとられようが、前述したように、この人間に視点を当てた議論においても全体と部分の相対性は、神の原初的本性の指向性と神の結果的本性の統合性とともにもその価値的方向性の絶対性を全ての部分に浸透させ、そこには絶対性を持った全体の存在がある。この終極においては統合作用の主体が統合主体として究極存在することになる。そこへのプロセスにおいて部分は絶えず究極をどのように受け止めるかが問われることになるのである。ここでは問いと信仰による行為の選択がプロセス内における課題であり続ける。作用は先に記したように絶えず流動的で支えの構造さえそこにはない、これを支えるのは永遠への延長を可とする統合性を見出しそれと連続性を保って實在への歩みをたどる道以外にない。そこにあるのは真の主体という統合人格の一としての存在を多様な一存立の集合性のなかでどのように生きていくかという生きる現実の目的性に沿った作用統合の行為の継続のみである。人格作用しかも主体的統合という目的性のなかにある人格主体はその高度化の歩みを限りなくたどり、自らの一たる存在を客体化し、さらにその終極において自らの客体化を経て、他としての個的存在に受け継がれ、高揚への歩みをたどり続ける。ここでの作用とは根源的には現実的實在間における働きの全てをさす。それは、流動的で固有の働きとして固定することができない。しかし存在の継続的延長を無限に照合して捉えるときに、永遠的客体の一たる存立と選別を経た主体への継続的受け渡しをそこに想定することができる。このように集約されてゆく働きとしての作用はその延長性の確保に向かう作用という性格性を持つが故に統合作用という性格を持つことになる。その統合作用は人間においては統合的主体たる人格としてその態様を維持するものその作用は一定の形としては捉えることができない。それが主体であるが故に捉えることができないのであり、客体化の段階は存在の一たる終焉において訪れ、この作用はその延長に継続が高揚した統合作用としての延長を可とするかぎり、新たな統合作用の受容として存続し、新たな主体が存立していく。しかし統合が人間の存在に対する前方よりの主体の働きであるが故に人間存在においては捉えることができない。絶えざる前方の働きとしての主体の高揚は神の結果的本性による導びきとして捉える意外にない。主体はどこまでいっても捉えることができず、それを想念しその絶対への信仰によって心的根幹から心に頂くことができるのみである。この不確かさ故に客体化の現実からみると、人間の想定のコアにおいて信じ難さを指摘され続ける。しかし、この統合作用の高揚した彼方からの作用を獲得できない存在はそこに存立する流動性の渦中において存在を危うくする。統合作用という絶対による一への想念の存立によってのみ客体化プロセスが永遠性へとたどり着き、それ故に真の科学

の名に値することになる。最終的な絶対統合への信仰とその実践こそ最も科学的な方途であるからである。そこに流動的存立の存在基盤があるといえ、科学性はその基盤に発する統合性との一貫性によって成立することになる。

短くこの章におけるいくつかの確認をしておこう。全体性の内部には作用の渦巻きが作働しているが、しかしそれは統合性への営みとの繋がりによって存立を可としている。そこには永遠の客体を選別するという作用が全体的統合性への抱握を完遂する働きとして内在している。こうして現実的実在はその作用化への流れに融合し全体へ向う段階的な抱握態を構成していくことになる。

ところで、現実的実在は物質ではなく作用である、という大前提の元で議論が進められてきたのであるが、それは機能という「構造の一定性」を前提にする物ではないということを明確にする為の重要な事項であった。われわれのいう作用とはホワイトヘッドにおいては機能という意味合いを持たされているように思われる。この作用という表現の重要視という観点について、ホワイトヘッドとの異なり、というよりも、ホワイトヘッドにおける主張の真意には作用という言葉の方が、形として捉え難くそこに流動的に存立するという動態についての当を得た表現になる。このことを章の末尾に再度確認して次章へと進みたい。

7 一たる個の存立条件を連続的に定立する

見えない、かつ到達をなし得ない全体への道を表現する作用論とプロセス哲学の融合的理解をこの章に集約しておく。これにより、一たる個の存立可能性の条件を位置づける基礎的考察を前進させることができる。

作用とは、これまで見てきたように形としては把握できない⁽⁵⁴⁾。それは永遠の彼方に想定することができる全体への道たる働きという動的態様の元に表現できるのみである。それはまた「無限に存在する現実的実在が形成する一たる存在へのプロセスそのものの多様な複合体のエネルギーの流れ」である。当章の題目にいう一たる存在への道を形成する条件とは、その捉えきれない作用の動的態様たるエネルギーに対する働きかけの力動化の内実に他ならず、その存立の条件形成は、いうまでもなく現在に至るまで人間における最も困難な課題であり続けている。長い年月にわたる歴史上の推移にあって、一たる存立を可とする作用動向が統合化へ向かう条件形成として現実化してきたし、また現実化してゆく。現在においても人間の生命存立を地球上において条件づける各様の手段が一たる存立への営みを支えるプロセスとしてたどられている。そうした作用条件を形成していく歩みがあらゆる分野でなされている。これら全てはこうした人間存在を支える条件設定を求める歩みであるけれども、存立体個々の一たる存在態様の全てに関わり、その自立的存在条件を形成する努力は、一たる存在の困難を抱えることへの困難乗り越えの働きかけから始まり、その困難性あるが故にその克服という課題にどのように立ち向かえばよいかについて解き明かす学的努力と実

踐行為が展開されていく。そのような現今の状況である。まさに「この子らを世の光に(糸賀一雄)」と表現される在り方に、「生き辛さのなかにある人々」の生のプロセスを出発点にしてわれわれは教えられ条件設定・整序の広がりへと導かれてゆくことになる⁽⁵⁵⁾。

人間存在を支える諸条件はいうまでもなく生活の全てにわたる、これはまずわれわれの世界における文化状況のなかから問われ実現の歩みが始められねばならない。それを福祉文化の議論として触れておかねばならないが、一番ヶ瀬康子は福祉文化学会の開始をもって本格的に学的にその歩みを進めている。そこにいう文化とは「環境に働きかけて、より真なるもの、より善なるもの、より美しいもの、聖なるものを生み出していく過程そのもの」と理解されている。それはこれまでのわれわれの視点からすると、これまでよりも一層人間に即して「文化を『生』のプロセス」において理解することが重要であることを知らしめる。その基盤としての「下位文化……生活文化が福祉文化においては重要」である。それは日常生活ニーズの充足実現のなかで形作られていく。このような福祉文化は、さまざまな文化領域との結合のなかから実現されていく。したがって文化とはその時代毎にその時代の全ての基礎として作動していく故に、この文化に一たる個の存立を支える条件を打ち立てることが必須となる。以上のような視点を元に福祉文化を、人全てに開かれた自己実現ないし人間の真の自由への道の為の個及び一たる個を取り巻く精神的身体的・物理的・制度的条件の総体として位置づける。一番ヶ瀬は福祉文化とは「その社会的具現化・実体化＝福祉が文化化された状態」を意味するという。特にその出発点として、人間らしい日常生活基盤の形成と質の高度化が最も重視される。まさに一たる個の存立に関わる条件形成である⁽⁵⁶⁾。

それについて少しく解題的に述べてゆくと、全ての人の人間らしい生活への道、換言すると、生活の不自由さから自由への道。その自由の為の手段の一般化。それは福祉上のノーマライゼーション(バリアフリーからユニヴァーサルな在り方への前進、そのさらなる広がりとしての「スヌーズレン(人全ての安らぎの形成[スウェーデン等における])」)の社会通念としての定着を進め、どのような場においても普通の日常生活の連続を保障できる条件を設定し具体化していくことを社会施策の中核に据える。それには生活の各所における在り方が改善される道程が求められる内容として念頭に置かれる。病院のなかにおいても、施設のなかにおいても生活モデルに基づく生活設計が重要となる。在宅における生活者の日常においても人間らしい生活を考究する。さらには、教育のなか位置づけられる福祉文化——人全ての自由な能力の発揮という解放をもたらす。さらに福祉思想の一般化に貢献できる。関連するが、広く諸芸術表現、諸関連学問のなかにおける福祉的側面の取り込み。芸術のなかの福祉文化(芸術表現、芸術享受の一般化)——人をより高い喜びに向かって解放する在り方の一般化。また福祉文化の一般化には、メディアのなかの福祉思想の一般化が欠かせない。新聞、ラジオ、テレビ、映画、等々のなかにおける福祉思想の定着等⁽⁵⁷⁾。

こうしたことは、おのおのバラバラになさるべきではなく、生活構造の全ての場において、質の高度化を伴ってなされることを必須とする。下記の各生活構造要因は、相互に関連し合って存立し

ている。それぞれの概要を知る為の各構造因子の一端を下記しておく。

【生活関係構造】 家族関係：近隣ないし地域関係：生活援助の人的ネット（専門，非専門）。【生活手段構造】 日常生活用具，移動・交通手段等の配置：医療・保健制度等：生活援助・回復・問題予防の制度・活動体。【生活空間構造】 住居：地域環境：生活環境に関する諸制度。【生活文化構造】 学問・芸術・娯楽等（享受・活動参加）：教育・文化制度。【家計構造】 家計収入・支出。【生活時間構造】 日々の生活時間の生活のニーズ充足へ向かう配分状況⁽⁵⁸⁾。

こうした生活構造の全てにわたり確立への歩みが，一たる個の生存の人間たる生の充足を存立さすべくたどられねばならない。このような生活構造の確立と質の高度化は，それを取り巻く社会体制との「力動的」関係性のなかで進行してゆく，その周りを取り囲む世界へとその動的連続がプロセスを形作ってゆく。福祉文化とはこれら全てを含むことになる。

われわれは，このようなステップを段階的に経ながら，究極を見つめながらも作用の高度化の段階を連続的にたどってゆかねばならない。こうして上述の方向に端を発する一たる個の存立条件の連続的定立が求められ具体化されていく。こうして人間存在の根底からの平等性が定立されていくことになる。これは個の一たる存在の客体化，そうしてその永遠的客体化へと進み，その永遠的客体へのプロセスは「合成種」と「主体的種」という展開を経て，客体化をなす主体の新たな私性による主体的我有化すなわち抱握されてゆくことになる。このときにその手掛かりの内実となる存在性の開きのなかで提示される開きへ向かう課題克服の条件の複合体がある。そこにある示唆における指向性の成立が，一段一段の抱握条件としての起点的内実となる。こうして客体化をなし得る領域から，もう一つの極としての前方の統合性の元で歩みを可とする方向への進行がなされていく。それを人格主体への歩みとしてわれわれはいまこの存在から想念によって捉えていくことができる。これは前述した平等基準の条件としての福祉定立の道程とみなすことができる。

8 相互包摂状況の連続が築く福祉的生の基盤

抱握論を福祉の具体においてたどる。相互包摂の実体化としての福祉的生の基盤となる福祉的生の条件がある。その条件成立の現実を明らかにすることをこの章では試みる。それは私性と公共性の両極とその両立のなかに成立していく共生社会の形成課題に答えていくことにもなる。

前述した「延長プロセス」は「抱握論」によって支えられ，一たる存在の客体化をなす主体の位置を経ながらその継続において「主体から主体への前進」がたどられていくプロセスがあり，ホワイトヘッドの表現にしたがうと，「この超越的創造の為の特殊な可能性は，拾い上げられ，停止され，情緒を帯びさせられる」ことになる⁽⁵⁹⁾。ここにおいては，基底における経験の影響下で，高揚した命題的感じを経て意識において捉えられた命題となってゆくプロセスがあり，抱握が進行していく。高揚状態への包み込みが我有化という動的態様のなかでなされてゆくが，それは前述した前進

的かつ高揚化のプロセスの内側において多様な形で現出する愛を例に引くまでもなく、相互包摂という平等を土台にする多様な相互関係性が作用し合っている。その関係性は、一たる個が相互に関係し合い生の完結に至るまで包み込み合うなかで価値形成的な営みを形作りながら一たる存立へ至ろうとする歩みの表現となる。この営みは人間存在の在り方の命題をそこに如実に表し、選択が迫られ、その選択によって延長の可能性がまさに整序的となっていくのである。そこにおいて真としての命題の感じから命題そのものへの抱握性を保持していくのが核心となるのが福祉性の方向への道である。それが作用性の統合化の営みという内実となるのであるが、それは生存の困難、一般的表現を用いれば生きづらさの緩和・除去の実践領域における作用形成をなすことから広がりを持って生き甲斐への前進・堅固化を含み人間の存在価値の充足に到る各様の条件設定となる。ここにおいては命題の感じから命題への意識化の営みが重要になる。

以下に他稿で述べた福祉的生の基盤条件整備を概括的に示し、福祉形成を抱握のなかに見ることができる福祉論上の確認をしておくことにしよう。われわれは、ここで福祉という言葉で表現する一たる個の存立基盤づくりのまさに原点となる社会福祉の位置づけを確認することからその概括作業を開始しておくことにする。それが最も一たる個的生の存立に困難を有するその人への働きかけの神髄を内包するからに他ならない。そうした社会福祉から開始され拡大し広義へと進行する福祉への流れを端的に表現する内容を下記する。

それは「その人のおかれた一定の社会体制のもとで、人間の社会生活の基本的欲求の充足をなす個人と制度的集団との間の社会関係において生じる。それは、人間の主体的及び客体的条件の相互作用から生起する諸々の社会的不充足あるいは不調整関係に対応している。また、それは、その充足、再調整、さらに予防的処置を通じて、社会的に正常な生活水準を実現しようとする公私の社会活動の総体を意味する」（嶋田啓一郎）とする社会福祉に関する提起である。われわれはこの提起を重視しておきたい。嶋田は、この位置づけから出発する自らの社会福祉論を「力動的統合理論」と称し、目指すべき方向を「全人的人間の統合的人格の確立」と明言している⁽⁶⁰⁾。この福祉の基本的位置づけのなかには、福祉の機能論とされる岡村重夫の考察にも細やかに配慮応答しつつ、さらには、経済社会体制の問題状況を克服せんとする改革の方途をも内包するという総括性を保持している。しかもその論は単なる構造転換に留まらず柔軟なしかも固定化を避けた要請を許容し流動的な前進と統合性への歩みを包摂している。

われわれは、上述した福祉論（ないし社会福祉論）の立場に立ち、その一たる存在としての個の抱える問題状況からの離脱を広義に捉え、その人のあるいは人間全ての人間の生のニーズ充足をもたらそうとする条件整備の要として福祉の方向を捉える。この論点から出発することによって、人間的生のしかも全人的生のニーズ充足に関する諸条件整序のプロセスがその端緒を開くことになる。この開示を福祉の目途として嶋田が示した「統合的人格の確立」という福祉内実からの展開のなかに見てとることができる。われわれはかつて拙著「社会福祉における相互的人格主義Ⅰ」にお

いてマックス・シェーラーの人間学を軸に置き、福祉目的を人間の生の細部において論じ、それを自我的人間把握から人格主体への道筋において把握することを試みた。上述の福祉目的たる「統合的人格の確立」とは、まさにこの目途との合一性において、われわれの論点を支える起点といえる。シェーラーによると「人格が心理的意識内容の統一としての自我とは異なる」として捉えられている、「自我とはどこまでいっても実験科学的な考察の対象であって知覚によって捉えられる」したがって「知覚不可能な主体的な意味を有していない」。それに比し「人格は事物や自我が対象化されるようには対象とはならない。それは作用であり、しかも多様な人間的作用を統一的に纏める作用中心である」。作用中心であり、したがってそれは主体である。かくして人格主体としての位置づけが明瞭にされる⁽⁶¹⁾。

ここに示される自我と人格主体とは、シェーラーにおいては二元論とみなされる表現のなかに終始し、自我から人格への道は閉ざされていた。しかし、われわれがこれまで見てきたように、量子論的に捉えていくと、その量子的存在としての「現実的実在」はまさしくこの二元的存在を克服する両極存在としてあり、その相互性の元に両者は両立できることが明白にされる。この量子論をベースに置いたホワイトヘッドの有機体の哲学ないしプロセス哲学において、われわれの自我領域に人間の生活構造の確立という人間の生きづらさから脱することのできる一たる個の生の基盤を条件整備の重層的形成の元に創り上げていく、さらには個々の基盤の上に立って一たる個の人生全体にわたる生の貫徹のなかにその個の潜在能力を含む全人的人格の確立を求めその為の条件整備がなされていくという人格主体への道が確実に姿を現していくことができる。それは両極の両立でありその作用の相互包摂が抱握の連続のなかで主体的進行をたどり、そこに統合性へのプロセスが形作られていく⁽⁶²⁾。

この福祉論の解題を、下にホワイトヘッドの見解に即しながらさらに深めておきたい。

福祉論上の議論をわれわれの論と関わる場所に絞って上述してきたが、この段階で「命題的感じ」から始まる「存在者の段階」へと戻り議論を深める作業を進める。それは「知性的感じを度外視する」という前提の上で、「ベルグソンの純粋な本能的直感の段階」に通じるというホワイトヘッドの見解を前に引いた。こうした歩み行きは経験の積み重ね、そして意識化の連続のなかで高次化がなされてゆく⁽⁶³⁾。この高次元化によって命題の真が選び取られ、そこに総括的に表現すると「純粋な物理的な目的的な段階」、「純粋な本能的な直感の段階」、「知性的感じの段階」という三つの段階をたどって、内容的には、上述した、生きづらさの緩和・除去から人全ての生き甲斐の堅固化に至るプロセスが、自我上の人格の求める充足を達成すべく形作られていく。それは一たる個の人間の存在としての客体化に至るまで、目にすることができる範囲のまさに形の成就として進められていく⁽⁶⁴⁾。しかしこれは自我世界の客観的形成を目で見えて把握するのみでは真の充足となることなく、絶えずその段階を越え出た前方の統合性を念頭に置いた人格主体への歩みが一たる個における一の客体化に至るまで、それを客体化する主体の存在（それは抱握の整序の元にある）によってな

されねばならない。これに個の存立条件の充足条件として絶えざる作用的働きかけがなされなければならない。その存立と継続の存立が延長を可とする整序に他ならないのである。それにより主体による我有化が成立し、主体から主体への受け継ぎがなされてゆくことになる。ここにいう主体とは。統合主体であり、そのなかに一たる個が「客体的種」として受け継がれていく。これは前述の公共性と私性について述べられたホワイトヘッドのいう永遠的客体の二区分の客体的種であり、これに対し、「主体的種」とホワイトヘッドが呼ぶ永遠的客体の主体的作用の「感じ」ないし様態が主体的統合の主体態様にあたる、とわれわれは位置づけている。したがって一から主体化への歩みは、私性から客体的種、さらなる主体的種へ、さらに主体へという経緯をたどっていく⁽⁶⁵⁾。この主体へ至る諸経緯において延長が保持されていく。

こうした諸段階が延長のなかに連続していく。ホワイトヘッドは、このプロセスを明示的に示す固定化を避けている。その明示的峻別を否定し、「あらゆる度合いの重要性ないし非重要性を伴った、知性的感じが存在する諸段階がある。そしてまたより高次の段階においても、最終的満足（充足）において、物的であれ命題的であれ、それ自身の固有の特質をのみ獲得する感じの全面的休息がある」としている⁽⁶⁶⁾。そうして、一たる実在の客体化とその主体的受け止め、さらにその連続という抱握の連続は趨勢状況として、福祉性の充足というプロセス遂行の為の条件形成として明示してゆくことができる。抱握は、そうした福祉性の充足の存在という条件形成の支えを経てその存立を前方に向かって継続的に達成してゆく。

この条件充足が現実的実在の充足の内実としてなされていくにあたって、それを構成する感じを区分する二つの在り方にホワイトヘッドは言及している。それが前述した発生的区分と整序的区分であり、後者については、(形態論的、延長的)区分 (coordinate, morphological, extensive) とともにその整序性の内容に視座を注いで表現している。前者は我有化が合成されてゆくプロセスを示しており、そこでは統合化という主体の働きが行使され一への客体構成の端緒が始まっていく。さらに後者は具体的なものの区分とされ、整序や延長、形態化という表現によっても示されるように、一という客体が命題の真へ向かい形を整える作用プロセスがそこにはあり、統合主体という存続の要となる方向性を持つ作用動態がまさに複合的に作用する段階の相が節目毎に開始されていくのである⁽⁶⁷⁾。

その動向は抱握論が拒否する二元的分裂の克服として位置づけることができる。まさにその動向こそ延長を可とする前方の我有化による主体の明確化であり、その作用形態といえる、形を有することのない動態が作用していくその力動性が姿を現すことになる。この我有化とは、この段階でいえるのは、ホワイトヘッドのいう「私性」からの離脱であり、公共性の広がりのおかげで、主体的統合のさらなる延長の可能性が確実化されることに他ならない⁽⁶⁸⁾。

ここに、私性と有機的に連続する公共性が確実化されていく。さらにそれは現実態の二元分裂的把握の広範な否定にもなる。それは、前に述べたように例えば公共性と私性に関する議論にも延長、

連続という形で答えをもたらしていくことになる。一たる個を客体として抱握しながら、主体が主体へと延長の広がりや形作るなかで、次第に一たる個の充足条件が継続的高揚を経て形作られていくことになる。

9 福祉形成における両極性と相互包摂性

両極性が相互包摂化されていく世界において、内在する個々が有する指向性の元にあって形作られてゆく福祉の営みが存在の永続性を支える。その永続化を可とする役割が福祉という人類の生存課題「生存基盤の継続的設定」の段階を経た成就に託されている。

公共性と私性、善と悪、豊かさと貧困、苦と楽等々、われわれの存在には両極性と名付けられる様態が満ちあふれている。公共性と私性においてみたように、この両極性とみえる相異なり、二つに引き裂かれているように把握される様態は、その性格上の二分性を分析的に見ていくときに、二分分裂ではなく有機的に相互連関の元にある両立体であることが明瞭となる。それは統合性との連続性を保持しうるかどうかという基準で図られたときに統合性を離脱したり、その有り様に大きなダメージを与える何かを内包していたりという性格性ないし特性の有無によって断絶や分裂しているかに見えてしまうのであり、実際は決して二分分裂しているのではなく、それは人間の一方的な判断によってそのようにみなされているに過ぎない。二者は相互性を持ち関係し合っている。われわれの表現でいえば両立している両極である。

それでは上に列記し、さらに多くを例に挙げるができる両極態それぞれは、上述の単なる統合体への前方志向性を保持しているかどうかという基準値で判断できるのみなのであろうか。否である。われわれはここに機械論的基準値に即した統合性を導入することを否定する。それは統合性の有り様に関わることではあるが、われわれは、そこに関連づけられ延長のなかに主体性の高度化を形成していく有機性の原点に重要な命題的感じと命題において主体的な全体性を捉えている。主体的全体は、絶えずその包摂する多様に存在する一たる存在性を、個々の指向動向への働きかけによって統合性へと調整してゆく。そこにおいては全体に至る道程を歩むことで一たる存在性における指向作用と全体性に内在する統合作用が連続性を完遂していくことになる。その完遂へ向かう作用動向のなかで、両極の作用も統合へのプロセスをたどることになる。そこにおける指向性と統合性、及び流動的な作用として作用を続ける両極の各様の動態が全体のなかでそれぞれの意味を持つことになる。

このわれわれが想念することのできる位置においては、神の存在が絶対性を持って全体としての位置のなかに存立している。全体性の延長の要諦にあるその原初の本性と結果的本性という始めにあり終わりにある神を前提にすることのない世界はその存立の基盤すなわち位置づけの全てを失う。神の存在を前提にして統合性を捉えることなくしては、その統合性が永遠性へ向かうことを喪

失することになる。その神とは愛としての神である。この愛としての神の實在により、本稿で述べてきた全てに一貫性が与えられる。愛が統合ないし統合力としての神の神髄といえる。ここにあるのは単なる統合性としてではなく愛による統合としての神の姿であり、この愛あるが故に一たる存在の全ての高揚を経てそれぞれを包摂し、その背後で絶えざる抱握をなす存在の永続性の保持が可能になる。なぜなら、断絶を乗り越え継続を可とし、永遠性の保持としての実存への開きの成立がそこに許されていくからである⁽⁶⁹⁾。

このように愛としての神に基づく統合性であってはじめて永遠なる延長への道筋が与えられることになる。その愛においても、われわれはキリストが説いた愛によって、究極の存在性の在り方を知ることができる。なぜならそこには人間社会における福祉性という存在性への倫理的価値基準が指し示されており、それにしたがうことにより人間存在のいまここにある一への道がその存在の究極から成立してゆくことが許容され、その道がさらに延長の道筋へと続くからである⁽⁷⁰⁾。

ホワイトヘッドのいう全存在にとって根源的な極となる両極性は、前に引いた公共性と私性、真と偽、さらに取り上げてゆくと、物質と概念性、全体と部分、善と悪等々、枚挙に暇がない。このそれぞれは、両極として対立関係にあるようであるが、それぞれは、関係性において両立している、それぞれは、関係性のなかで相互に包摂し合い、その態様の性格性ないし力点の在り方次第で世界の歩みを歴史上において決定していく原点になる。原点の位置と力の有り様を決するのは、一が多様な存立の有する指向性において相互的諸結果の最終的有り様である。相互包摂の諸結果は、部分的全体の段階における抱握により、そこに作用する主体的方向への延長動向がさらなる指向性を形作っていくことになるが、それにより決せられる。そこに永続性を確実化していきさらなる永続へと営みを続ける為の存在上の極となるのが真及びそれを基礎づける善であり、その善を真との関係で確実にするのが福祉性である。その福祉性とは、あらゆる存在における存在価値を一に値するまで形作る一たる實在の成立条件である各種各様の制度、技術、理念である。そこにいう福祉性とは愛の根底的な実現である。これまで述べてきた両極の存在、その両立の可能性、それらの相互包摂、そこにある選別、さらに条件整備の全体を貫徹するのは、究極主体たる神の愛以外にない。われわれの世界においてはキリストの説いた愛に他ならない。さらに言葉を尽くすならば、このキリストの説いた愛は、福祉性を形作り、それは相互包摂を可能にし、対立極の両立性を両極の存立のなかで可能にしていく。こうして有機的プロセスが可能になっていくのである⁽⁷¹⁾。

最後にホワイトヘッドのキリスト教論に対して示されているいくつかの疑問点について先達の究明を参照しつつ、それに応えていく。

ホワイトヘッドは、「現実的實在の合成過程を目的論的に共同する概念的なもの」、「永遠の客体は当の経験主体によって、それに先立つ物的なものに例示されたものから経験的に導きだされる」としながらも、他方では「それは……原初的本性における神に由来する」という。ここに錯誤を見出す向きがあるのも頷ける。しかし、これは山本誠作もいうように「概念的なものが現実的實在の

合成過程に進入するその都度、そのスポットに、原初的本性における神が内在する」と考えることにより、打破できる論点である⁽⁷²⁾。神はまさにその場にいたもう現実的実在そのものである。「現実的実在」は「原初的、補完的、自己超越的な三つの相からなっており」、神もそのような「現実的実在」としてあるのである。この自己超越性とは、神による「救済」「愛」とされる。それは客体化、すなわち「自己に死して神に生きる」、すなわち「神のうちに客体化される」こうして神の原初的本性は神の結果的本性の内に統合されることになる⁽⁷³⁾。さらに山本は、「神の自己超越的本性」について解題をしつつ、「流動する世界は神の永続性のうちに摂取救済される」。神はそれとともに「世界を救済しながら世界に自らを与えてくる」とするホワイトヘッドの主張を取り上げている。ここにも錯誤が見られると多くが指摘する。「時間的な現実的実在の客体化」としての世界は、それが消滅する存在であるにも関わらず、「神は決して消滅しない」ということに錯誤が指摘される⁽⁷⁴⁾。これに対しては、ホワイトヘッドが理解の為に提示する「普遍的相対性原理」がその解としての役割を果たしてくれる。「多と一を通しての働き」は、いつも神を通して働く。多と一の相互的働きにある全てを貫く創造性があるが故に神は原初の本性と結果的本性を統合してゆく。そうして「自己の実現するその都度」において「自己を世界に与える」とされている。したがって、神は「消滅せず」、自己を再び世界に客体化する、と理解される⁽⁷⁵⁾。

こうして神は創造し、創造されるという流動的關係性のなかに存立し続ける、しかし流動性のまにまに漂うのではなく、そこにある恒常性そのものという理解がなされる。さらに神は永続的である、しかし永遠的であるということとはできないとの論にも言及しておく。神は彼方にあるおぼろげな永遠ではなく、明確に実在する永続の前進の姿そのものである。ここには自己を世界に与えるという行為の主体としての姿があり、この全き主体としての神を、それを越えた力を想定し捉えることとはできない。神は全き主体であり、実在であり、まさに明確に永続していく主体である。「それらの主体的形式において、交互的感受性ならびに主体的指向の主体的統一性を例証している。」⁽⁷⁶⁾ こうした現前する神は、ホワイトヘッドによれば流動的であり、また恒常的である。ここにいう流動性と恒常性は、前述してきた二元論的な把握ではなく両極的にしか捉えられないというホワイトヘッドの言説にしたがって理解することができる。さらに、ホワイトヘッドは現前する神を世界との関係性において問うときに、世界が神の内にあるとともに、神の世界における内在を真としている。これは神が世界を超越するという事実と、世界が神を超越するという事実を同じとすることに通じる。ここにおいては世界の全てと神は「対照化されて対立する」しかし「コントラストのうちにある合成的統一性への転換」がそこにはある。そこにおいて「対立する要素は互いに要求し合っている」が「神はいっさいの心性の無限な根拠であり、物的諸多性を探し求めるヴィジョンの統一性である」。このなかで、神は世界を創造し世界は神を創造するということが真とされている⁽⁷⁷⁾。こうした前提の元に流動性と恒常性が統合された理解へと転ずることになる。ここに両極性の動的な作用は失われ、一元化ないし強いては物質主義に墮する危険が生じてしまうともいえる。われわれ

はこの両極性の受容にあたって、またその二元論的分裂をも回避する方途として、永続しながら向かい続ける永遠の方向としての結果性たる全体を概念的、かつまた実在としてもあるとすることにより、過去からいまここにありさらに永続し続ける作用的一元性が対象化される物的多元性の流動性の中で関係的相互性を持ちながら、流動的にかつ作用的恒常性のなかで前進的推移をたどるといふ両立性を、これまでの考察の論軸に添って明確に知ることができる。この説述をホワイトヘッドの議論の補足的理解としておきたい。全体の永続は、内実としての統合作用の実在によって存立し続け、それは全てを包摂する愛としての神によって存在を可能としていく。それは作用上の一元化の永続という神の実在が現実における流動性のなかで目的的に創造しながら、作用の具体化として創造されていくというプロセスをたどり、それはまた、永続する神が世界に埋没するのではなく世界の流動性のなかで神の目的性の具体化を図る行為が完遂されていくと理解されるのである。そのなかで神は自らを世界に与えていく、そうして神は自らを世界に客体化し、自らをそれによって実現していく、それはナザレのイエスの姿に体现されている⁽⁷⁸⁾。

このような作用の具体化として人間存在に課されている行為実践が、困難を抱える生活のしづらさからの脱却作用における条件形成となり、そこから始まる、人間世界の人間存在の全てに自己実現の可能性への歩みを許容しようとする道となってゆく。その歩みによって有機体の概念化が、そうして相互の為に生き会ってゆく概念の結果性としての、まさにキリストが示した愛の完遂と広がりがあり、生きる一たる存在の内側から完遂への営みを永続化へ向かい飛翔させてゆくことになる。それにより抱握の高揚、神による我有化の前進、その物質次元との関係性の相互包摂の進行が果たされていくことになる。それはあくまで相互包摂の進行の永続化であり、そのプロセスは両極の両立である。そこには両極が存在するとともに、結果性の最終概念としての愛の全体性のなかにおける数多の両極の両立、現実的実在間の相互包摂が存立し、そうした相互包摂の核に主体としての統合性が神の結果的本性としてわれわれを含み、存在性全てを抱握している⁽⁷⁹⁾。

注

- (1) われわれは、人間存在における福祉的存立の条件を探ることを試みながらも、その存在の媒介項となる存立条件とホワイトヘッドがいう抱握論から統合性への作用、さらには統合主体への全体としての歩みを明らかにしていく。
- (2) Whitehead, A. N., "Process and Reality, 1927-28". Cambridge edition 1929, 山本誠作訳「過程と実在(下)」, (著作集11巻), 松籟社, 1984, 520-521頁。
- (3) 同訳書, 「過程と実在(下)」510-512頁。この立脚点の有り様についてホワイトヘッドは三つの関連状況を引いて解説を加えている。まず、各現実的実在が生じる現実世界が第一の立脚点と考えられている。第二に多くの中間的現実体を包含することになる「媒質」としての現実世界が立脚点となるというどこまでも延長可能な状況世界がある。最後に、選択肢が、新たな合成の諸条件としてあり、選択される延長内での留保たる意味を持つ。
- (4) 山本誠作著「ホワイトヘッドと西田哲学」行路社, 1984年, 参照。
- (5) 上掲書, "Process and Reality", 山本誠作訳「過程と実在(上)」, (著作集第10巻), 36-37頁参照。Actual Entity(現実的実在), ホワイトヘッドは、この用語を存在の核をさす言葉として用いている。

- 本稿では、“actual entity”を「現実的実在」と訳している。実在というと客観化できる存在と捉えられるであろうが、本稿では、Entity という字義にある物的に在るものと観念との統合態を意味する側面を重視するとともに、また物的と心的の両極の両立態という意味を込めて、実在としている。
- (6) 上述の量子に関する理解は上掲「ホワイトヘッドと西田哲学」、12-15 頁参照。この量子に視点に注ぐことにより、あいまいな背景を把握する「非感覚的知覚」の存在を明らかにすることが可能にもなる。「非感覚的知覚」とは、感覚器官の作用動態としての「生理的プロセス」として理解される。上掲同書、77 頁。
- (7) 前掲訳書「過程と実在」399 頁。
- (8) 上掲訳書「過程と実在」399 頁及び以下に記述された意識や命題に関する考察を参照。
- (9) 同書、464 頁及び抱握論内の第 4 章「命題と感じ」参照。
- (10) 同書、465 頁。
- (11) 同書、468 頁。
- (12) 同書、469-470 頁。
- (13) 同書、505-506 頁。
- (14) 同書、509 頁。
- (15) 同書、520-522 頁。
- (16) 同書、522-523 頁。
- (17) 同書、525 頁。
- (18) 同書、596 頁。
- (19) Sankey, Haward, “Rationlity, Relativjism and Incommensurability”, Ashgate, 1997, pp3-7, pp10-12.
- (20) Laudan, Larry, “Beyond Positivism and Rerativism Theory, Method and Evidence, Westview Press, 1996, pp. 125-127, p. 128.
- (21) ibid., p131.
- (22) ibid., p. 140.
- (23) ibid., p. 150.
- (24) この議論は、ホワイトヘッドの抱握論への序章的説述ともなる。さらに内容を深めるため以下の議論を引いておく。「心的極」と「物的極」との合成の進行について触れる。その「合成しつつある経験の両極性は、物的極のうちの外に現実世界から派生する経験の客体的側面を供給し、心的極のうち、物的感じに相関的な主体的概念的価値づけから派生する経験の主体的側面を供給する」。「心的作用は」、「直接的主体のうち、それ自身の最初の与件から獲得されるべき満足（充足）に関して、その主体の主体的志向を達成する」。「このようにして、作用因である現実世界から派生する決断は、目的因である主体的志向のうちには体現された決断によって、完結される」。以上は前掲「過程と実在」500 頁参照。この考察は、本文にいう相互包摂の内なる作用の内実を表す説述に他ならない。
- (25) Geogia, Ivor Leclerc, “A. N. Whitehead; His philosophy”, In the Process in Context, Post-Whitehedian Perspectives, Ernest Wolf-Gazo (ed.), State Uni of New York press, 1989, P. 42.
- (26) ibid., Ernest Wolf-Gazo (ed.), Baltinore, Victor lowe, Whitehead’s philosophy as I see it., p. 54.
- (27) 前掲「過程と実在下」617 頁。
- (28) ハーツホーンは、この共通した分母を取り上げてホワイトヘッドの絶対的な存在を次のように解題している。「全てのものには出来事であるという特性がある。回顧的には、相対的で、展望的には絶対的である」。「これら二つの特性そのものは、出来事間にある全ての関係に共通した分母であり、これは「完全に絶対的である」。「全ての共通分母（永遠的客体）はホワイトヘッドが神の〈原初的本性〉と呼ぶものと同じと理解される」。「この神の本性は、全ての関係に含まれており、どこまでも絶対的である」。それは、諸々の絶対的なもののなかの〈絶対者〉であり、関係するあらゆる

- る選択肢に対して中立を保てる唯一絶対的存在である」。Hartshorne, Charles, “Whitehead’s Philosophy”, selected Essays 1935-1970, University of Nebraska, 1972, 松延慶二・大塚稔訳「ホワイトヘッドの哲学」行路社, 1989年, 170頁。
- (29) op. cit., Baltimore, V. I. p. 54.
- (30) 前掲書「過程と実在(下)」617頁。
- (31) 同書, 520-521頁。
- (32) 同書, 607-608頁。さらにホワイトヘッドは、「悪との格闘は、複合的な調和の構成を導来する中間諸要素を供給することによって、役立たせる仕方を打ち立てる過程である。」とも述べている。
- (33) 同書, 521頁。それは、ホワイトヘッドのいう「抱握は公共的履歴を持つが、しかしそれは私的に生まれる」という表現のなかによく現されている。私性と公共性とは二元分立状態にあるかに見えるが、抱握のなかで私性の多様な媒介変数と公共性の多様な媒介変数が相互に関わり、そこに相互的な関わりが相互包摂のプロセスを経て、私性と公共性の両極的両立とみなすことのできる様態を生み出していくことになる。すなわち「諸抱握の整序性は、私的発生からの抽象において考察されるかぎりでの世界の公共性を表現」することになる。
- (34) 同書, 522頁。前記註の16及び17参照のこと。
- (35) 同書, 525-526頁。
- (36) 同書, 542頁。
- (37) 拙稿「人間福祉における『プロセス哲学』の意味と可能性 part III」聖学院大学論叢第30巻第2号, 115頁, 2018年。
- (38) Pylykkanen, P.T.I. “Mind, Matter and the Implicate Order, Springer, 2007, pp. 23-24
- (39) Bohm, David, “Wholeness and the Implicate Order”, Routledge & Kegan Paul, 1980, 井上忠, 伊藤笏康, 佐野正博訳, 「全体性と内蔵秩序」, 青土社, 1986年, 248頁。
- (40) op. cit., “Mind, Matter and the Implicate Order”, p. 23.
- (41) 上掲訳書「全体性と内蔵秩序」250-251頁。
- (42) 同訳書, 257-258頁。
- (43) 同書, このホログラムにおいて、内蔵秩序と顕前秩序の区別が必須とされ、前者の正確な把握が求められる。599頁。
- (44) 同書, 260頁。
- (45) 同書, 262-263頁。
- (46) 同書, 268-270頁。
- (47) 同書, 347頁。
- (48) op. cit., “Mind, Matter”, p. 24.
- (49) ibid., pp. 137-138.
- (50) 牛津信忠「人間福祉学における『プロセス哲学』の意味と可能性 Part III」聖学院大学論叢第30巻第2号, 2018年。126頁。
- (51) 牛津信忠「社会福祉における相互的人格主義Ⅰ」第二章, 久美出版, 2008年, 70頁。
- (52) 前掲「人間福祉学における『プロセス哲学』Ⅲ」125頁。
- (53) 上掲「人間福祉学における『プロセス哲学』Part I」上掲聖学院大学論叢第29巻第1号, 2016年。123頁。
- (54) 本稿第6章末尾, 及び「プロセス哲学 Ⅲ(註33)」133頁, 参照。
- (55) 糸賀一雄のこの言葉は、現在及び将来においてもなお、生きづらさを背負う人々の生への真実の条件整備をわれわれに呼びかけている。
- (56) 一番ヶ瀬康子。河島修, 小林博。藪田碩哉編「福祉文化論」有斐閣, 1997年, 2-4頁。
- (57) 上掲書「福祉文化論」本書において福祉文化ないし福祉の文化化が上記した全域にわたり、極めて総合的に人間の生の営み全体を視野において細やかに述べられている。

- 58) 前掲書「社会福祉における相互的人格主義Ⅰ」142-143頁。
- 59) 前掲訳書「過程と実在（下）」505頁。
- 60) 前掲書「相互的人格主義」27-28頁，29頁。嶋田啓一郎「社会福祉体系論」ミネルヴァ書房1980年，15頁。嶋田啓一郎は社会福祉学の学問的確立への道を開拓した重要な先学であるが，それにもましてキリスト教倫理学者であったとわれわれは理解している。
- 61) 上掲同書「相互的人格主義第二章」，60-61頁。
- 62) 同書，拙著 相互的人格主義二章 68-69頁。上掲拙稿「プロセス哲学，第Ⅲ部」，114-115頁。
- 63) 前掲訳書「過程と実在（下）」505頁。
- 64) 同書，506頁。
- 65) こうして永遠の客体の一たる存立への推移とその抱握による主体への高揚が示されてゆく。「客体的種」及び「主体的種」については，前掲「過程と実在」522頁を再度参照されたい。
- 66) 上掲訳書「過程と実在」506頁。
- 67) 同書，509頁。
- 68) 同書，20-21頁。
- 69) 同書，611-613頁。
- 70) 前掲拙稿「プロセス哲学 第Ⅲ部」127頁，131頁。
- 71) 上掲訳書「過程と実在」614-615頁，617頁。
- 72) 山本誠作「ホワイトヘッドの過程と実在」100頁。
- 73) 同著，101-102頁。
- 74) 同書，103頁。
- 75) 山本誠著作「ホワイトヘッド『過程と実在』」104頁。上掲訳書「過程と実在」，621-622，624-625頁。
- 76) 上掲書「ホワイトヘッド過程と実在」108-109頁。上掲訳書「過程と実在」613頁。
- 77) 上掲訳書620-621頁。
- 78) Whitehead, A. N., "Religion in the Making", Cambridge, 1926 齋藤繁雄訳「宗教とその形成」（著作集第7巻）松籟社，1986年，41-42頁。
- 79) 前掲訳書「過程と実在」624-626頁。

Bipolarity and mutual hyponymy in the development of welfare :
Well-being as a method by which go-to operational integration of
totality exceeds the opposed structure of relativism and absolutism

Nobutada USHIZU

Abstract

This study considers human existence on the premise of the “actual entity” domain (Whitehead), which integrates relativity and absoluteness in operations.

The existence of actual substance domains is constituted from fluid mechanistic processes. This interpretation of existence is understood to be materialistic scientism.

However, dynamic existences that cannot be understood in the present, do exist. They are difficult to see, and can be recognized only in a mode called operations in process. For example, they can be understood as the flow of water. They could also be understood as a perspective on objectives, which can be imagined ahead.

The direction toward values of welfare, which we state as the flow of human life for the maintenance of the certainty of existence, forms the core of the above-mentioned perspective. The nature of welfare may justly be referred to as a key to analyze actual entity.

Key words: bipolarity, relativism, prehending subject, wholeness, human welfare